In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	Dictionario Hispanico-Sinicum にみえる入声字の分析
Author	Grady, Clare
Citation	中国学志. 34 巻, p.1-18.
Issue Date	2019-12-20
ISSN	0913-3151
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学中国文学会
Description	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

Dictionario Hispanico-Sinicum にみえる入声字の分析

Clare GRADY

【論文提要】

菲律宾圣多玛斯大学档案馆的《Dictionario Hispanico-Sinicum》是西班牙传教士与马尼拉闽南人合作编写的一部西汉辞典。在收录于此书的入声字之中，我们可以发现到许多“一字多音”现象。发生这些现象的原因主要有四个。第一个是“文白异读”，第二个是“单纯的拼写错误”，第三个是“方言的不同”，第四个是“训读字”。在这些发音里面，除了泉州方言和漳州方言(泉漳片)的发音以外，也可以发现潮州方言的发音。这不但是与当时中国人移民(Sangley)之出身地相关的一个证据，也是Sangley的方言被视为一种独立方言之可能性的一个证据。

0.　はじめに

本論文では、約400年前の閩南語が記録されているとみられる辞書『Dictionario Hispanico-Sinicum』の入声字の発音をリストアップし、同時期に編纂されたとみられる語彙集『Arte de la Lengua Chio Chiu』とも比較しつつ幾つかの角度から初歩的な分析を加える。筆者は今後、現代の台湾方言について、音声的な側面からの研究を行う予定であり、関連する作業として今回、『Dictionario』を通じて約400年前の閩南語についての音声的な研究を行い、また次のステップとして約400年前の閩南語と現代の閩南語の音声を比較することで、通時的・共時的な観点をともに視野に入れた、閩南語の詳細な入声韻尾研究を行いたいと考えるものである。

1. 『Dictionario Hispanico-Sinicum』について

2017年4月、フィリピン共和国マニラ市にあるサント・トマス大学の文書館（AUST）において、『Dictionario Hispanico-Sinicum』（以下、「Dictionario」という略称を用いる）という書名をもつ、17世紀に編纂されたとみられる中国語の辞書が、台湾清華大学の李毓中氏また中央研究院の陳宗仁氏らによって発見された。[1] この『Dictionario』の書名について触れておくと、これはラテン語であり、「Dictionario」については辞書を指す言葉、「Hispanico」というのはスペイン語という意味、「Sinicum」というのは中国語を指す言葉である。この辞書の形式が「中西辞書」（中国語→スペイン語）であるのか、あるいは「西中辞書」（スペイン語→中国語）であるのかという点に関しては、この辞書の構造をみると、スペイン語の単語の方がアルファベット順に並べられており、辞書全体において語彙を配列する基準となっているので、形式としては「西中辞書」であるとみることができる。

この辞書については、発見されてからまだ２年と８カ月しか経っていないことに加えて、先述の文書館に所蔵されていた期間中、この『Dictionario』原本に「価値が少ない」という内容の説明書きがなぜか添えられていたこともあって、従来はあまり顧みられることがなく、辞書の内容に関する分析や研究はまだ始まったばかりであり、専門的に論じた研究も未だほとんど無いという状況である。編纂された年や著者についてもよく分かっていないが、おそらくは1626年から1642年の間、スペインから派遣されてきた宣教師が編纂したのではないかと考えられている。全体で1,300ページの分量があり、それを３冊に分ける形で製本され、合計27,000種の語彙が記録されている。この語彙数は、計40,000の語彙が記載されているとされる大部な『康熙字典』と較べても半分以上にのぼり、今まで登場した中でも最も収録語彙数の多い「西中辞書」の一つであるといえる。関連して、そのほかに着目すべき重要な資料として、『Arte de la Lengua Chio Chiu』また『Philippine Chinese Manuscripts』がある。前者の『Arte de la Lengua Chio Chiu』（以

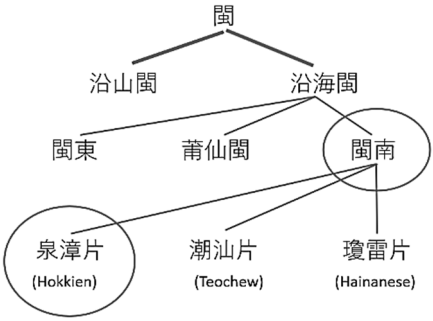
下、「Arte」という略称を用いる）については、中国語方言の研究者であるフンボルト大学のHenning Kloter氏による詳細な研究があり、その著書には、『Dictionario』の研究を行う際にも参考になる有益な情報が多く記されている。[2)]

2. 閩南語について

初歩的な検討を行った結果、『Dictionario』の内容は『Arte』のそれとよく似ていることが分かった。おそらくは、17世紀にフィリピンのマニラ市に住んでいた中国系移民の協力のもと、スペインから派遣されてきた宣教師の手によって作られたものと考えられる。マニラ市に中国人が移住した理由や、また彼らがスペイン人宣教師と協力した経緯に関しては、記録がなく確かなところは明らかではないが、いずれも経済的利益が関係しているのではないかと推測される。また、『Arte』の書名に含まれている“Chio Chiu”という言葉については、中国語の「漳州」という表記が該当すると考えられる。漳州は福建省の海沿いにある地名であり、そこで話されている方言は閩南語の「泉漳片」（Hokkien）に含まれるものである。ここから考えると、『Dictionario』もあるいは漳州出身の中国系移民の協力に基づいて作られた辞書であり、官話とみられる発音も併記してはいるものの、むしろ書名の「Hispanico-Sinicum」という部分には、スペイン語と閩南語「泉漳片」の辞書であることが示されているとみることができるかもしれない。

閩語以外の中国語の方言は中古漢語から分かれていると言われるが、閩語だけは中古漢語より早い段階で上古漢語から分かれたと考えられている。[3)] そのため、閩語には上古漢語の状況を残しているとみられる現象を確認することができ、これは上古漢語の復元に際しても有益な側面として知られている。ただ、その一方で、閩語の研究においては、特にその白話音について、再構成された中古漢語の発音を参考材料として活用することが難しいという一面もある。これは閩語の研究を進めるなかで、注意が必要な点である。

現在の閩語は、大きく「沿海閩語」と「沿山閩語」とに分けることができ、このうちの「沿海閩語」に閩南語は属している。「沿海閩語」に属する他の閩語としては、「閩東語」（福州市周辺）と「莆仙閩語」（莆田市および仙游県）などがある。閩南語はさらに細かく分けて「泉漳片」（Hokkien）、「潮汕片」（Teochew）と「瓊雷片」（Hainanese）の３方言に分けられている。[4)]



先述したKloter氏はその著書の中で『Arte』のことを“Hokkien-Spanish Dictionary”と呼んでいる。これは氏が『Arte』について行った詳細な研究の結果に基づいて、“Hokkien”という名称を採用したものである。『Arte』と非常に近似する内容を有する『Dictionario』であるから、『Dictionario』のほうにおいても、閩南語の泉漳片が記録されていることが予想される。

2.2.　閩南語の入声字について

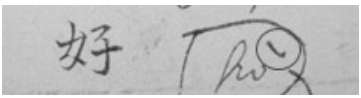
中古漢語の入声、つまり［-ｐ］［-ｔ］［-ｋ］三種の子音韻尾は、現在の中国語の方言においては、残存しているケースもあれば、弱化・消失しているケースもある。全体的な傾向として、南方の諸方言の方が、北方の諸方言よりも入声韻尾を保っているといえる。閩語の一種である閩南語についても、入声韻尾は残存している。ただし、中古漢語の入声韻尾と逐一対応しているわけではない。

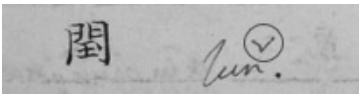
閩南語の代表的な一種である台湾語（泉漳片）を例に用いて概略を

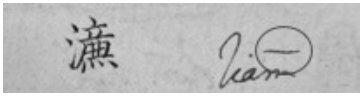
述べるならば、台湾語の場合には入声韻尾が４種類ある。それは［-ｐ］［-ｔ］［-ｋ］の３種、そして［-ʔ］（声門破裂音）である。台湾で使われている表音記号である「教会ローマ字」を用いてそれらを記すならば、それぞれ“-ｐ”、“-ｔ”、“-ｋ”、そして“-ｈ”という表記になる。例えば、「白」という字は台湾の教会ローマ字だと“pèh”と表記するが、これは決して引き延ばすような発音ではなく、実際の発音は国際音声字母で［peʔ］と記せるような内容である。また、入声韻尾と言えば、上海ほかで話されている呉語の場合は「声門破裂音韻尾」の１種のみを有し、また香港などで話されている粤語の場合は［-ｐ］［-ｔ］［-ｋ］の３種がある。入声韻尾として［-ｐ］［-ｔ］［-ｋ］の３種と「声門破裂音韻尾」の両方を備えているのは閩語の特徴の１つである。

入声の声調に関して、台湾語では陰・陽に分けて２種の声調があり、陰入は低い声調で第４声と呼ばれ、陽入のほうは高い声調で第８声と呼ばれている。いま本稿において検討の対象としている『Arte』、また『Dictionario』にみえる発音表記にも、それぞれに声調の表記があり、入声字の２種類の表記をみると、それぞれ「/-」と「\-」となっている。

他の声調の表記はどういうものであるというと、『Dictionario』の場合、さらに５種の声調の表記があり、以下に書影の一部を挙げたように、「/」、「\」、「^」、「v」、「ー」となっている。







これらの状況から推測してみるに、おそらく「/-」と「\-」の声調符号については、声の高低という点ではそれぞれ「/」と「\」の声調に似ているために同じ形を採用し、ただし長短という点では入声の場合は短くなってるため、「-」の部分を追加したものであろう。声調の記号についてまとめると、声調の表記は入声以外のものが５種類用意されており、２種のみである入声の声調については、「/」と「\」に「-」が追加されることで、入声字を表す記号が作られたと考えられる。陰入と陽入とがどちらの記号を採用しているかという点については、陰入（第４声、低い）は「/-」、そして陽入（第８声、高い）が「\-」であろう。

3.　研究方法

今回の作業の具体的な方法としては、まず『Dictionario』の入声字を全てリストアップすることを行った。リストアップした入声字を整理する際はExcelを使い、入力された入声字が何冊目の何ページにあるか、また原資料に記される声母・韻母・声調の表記はどのようなものであるかを、逐一入力していった。入力し終えた段階でソートをかけ、同じ字をまとめるという作業を行うことで、同じ字に対して複数の異なる読み方を記録している例を判別し、検討対象として整理した。

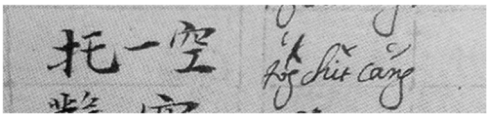
次に、読み方が異なる字に関してはその異なる理由について考察を行った。その際には閩語を収録・整理した数種の方言辞書を利用した。そうした過程を経て最後に、『Arte』に記録されている入声字の内容を『Dictionario』と比較し、『Arte』に関して行われた先行研究の見解も参考にしながら、後述するような一定の結論を得た。

4.　データ分析

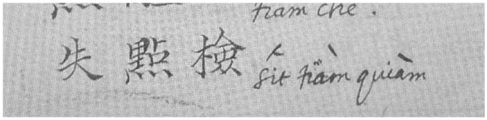
まずは、記録したスペイン人の綴り方のクセを理解する必要があった。『Dictionario』の綴り方は『Arte』にみられる綴り方によく似ているが、『Arte』についてはKloter氏によって既に分析されており、その

研究書に活字化されているので参考になる。[5)]

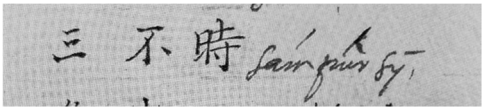
さて、入声字の韻尾に関して言えば、同じ韻尾であるべきなのに、綴りが異なるというケースがみられた。例えば、韻尾が［-t］であるはずの字の綴りをみると、「一」は“chit”、また「失」が“sit”になっている一方で、「不」が“pur”、そして「出」が“chur”になっている例がある。



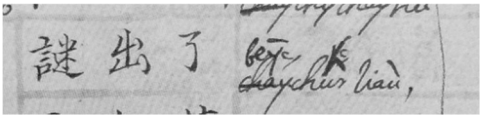
→「一」“chit”



→「失」“sit”

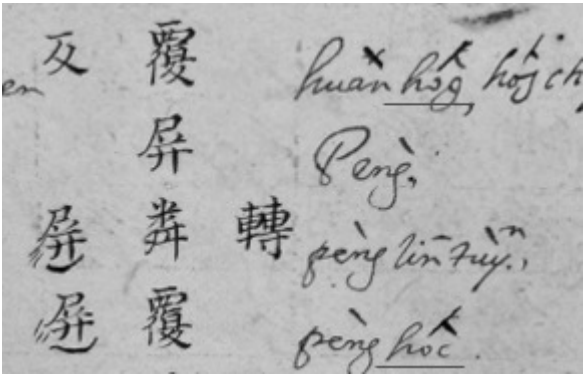


→「不」“pur”



→「出」“chur”

このような例については、スペイン語では［t］と［r］の音は舌をタップして発音するという点でよく似ているため、中国語の入声が内破音的であることによる「その時その時の聞こえの強弱」があるいは影響した可能性も考えられるが、つまりはただの綴りの違いであり、実質的な違いが生じていたことを示すものではないと解釈する。他にも、韻尾の［-k］が“-g”と“-c”の2種類で表記されたり（次頁書影参照）、韻尾の［-p］が“-p”にも“-b”にもなっていたりする例が確認される。これらについても、実質的に異なる発音を表しているわけではないと考える。こうした表記の違いにつながる規則として、前舌母音と後舌母音という環境の違いが影響する可能性も考えられたが、現在のところは明確な証拠を発見するには至っていない。



「覆」字の“hog”“hoc”２種

この一方で、声母の［k-］についてみると、次に来る韻母の違いによって、“c-”とされることもあれば、“qu-”とされる場合もある。スペイン語の綴り方の規則として、子音の“q”は単独で書かれることはなく、常に“qu”と［u］とのセットで書かれるということがある。そして、子音である“qu”の後に来る母音となると“i”と“e”の2種類しかない。仮に母音の“a”や“o”または “u”を書くのであれば、“qu”ではなくて“c”が使われる。こうしたスペイン語の事情を踏まえると、『Dictionario』に記される“c”と“qu”の声母は、表記は異なるけれども実質的には同じ音を表すものと考えることができる。

こうした綴り規則が関係して表記が異なる例以外で、同一字に複数の読み方がついている字については、大きく分けて次の４つのパターンがあると考える：①綴りの間違い、②「文白異読」、③泉漳片と潮汕片の違い、④当て字の利用。

4.1.　綴りの間違い

現在の普通話の表記にピンインが用いられるように、現在の閩南語の音表記には「peh̍-ōe-jī（POJ・白話字）」が使われているが、この音表記の方式自体は19世紀に作られたものであり、『Dictionario』が書かれた当時においては、閩南語の発音をローマ字で書くための定まった

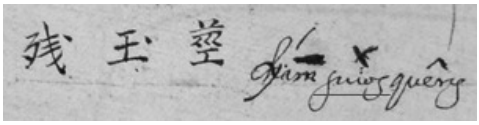
方式はまだ無かった。また、音表記を書いた宣教者はおそらく閩南語にそれほど詳しくはなかった可能性もあれば、さらには全てが手書きで書かれている。このため、この辞書に書いてある発音記号には、記録するその時々に応じて生じた間違いが少なくないと考える。綴りを間違えて記されたと思われる入声字は以下の通りである。いずれが「正しい綴り」でいずれが「間違った綴り」かという見分け方に関しては、いま例の多い方を「正しい綴り」として表に掲出している。

対象字	正しい綴り	間違った綴り
執	chip /-	chiip /-
學	hag \-	hac \-
慾	iog \-	yog \-
熱	xier \-	xyer \-
玉	guiog \-	giog \-
約	io /-	yo /-
結	quier /-	qier /-
葉	hio \-	hyo \-
藥	io \-	yo \-
覆	hog /-	hoc /-
軋	var /-	vat /-

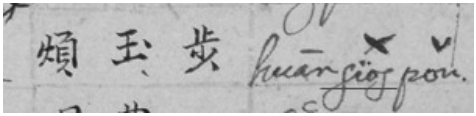
一番多かった綴りの間違いは、接近音の[j]の書き方であった。“Y”が使われた場合もあれば、“i”が使われた場合もあったが、総じて“i”の方が採用率が高いというところから、“y”が使われた場合の方を間違った綴りだとみなしている。

また、前述の“qu”の話に関係してくるが、スペイン語も英語と同様に、綴りの規則として、“g”は後に来る音によって発音が変わる。例えば、ヤギを英語では“goat”と言うが、キリンを英語で言うと“giraffe”

となる。同じ子音の“g”を用いていながら、前舌母音の前だと[dʒ]になることが多い。上表の「玉」の例に関しても、閩南語の発音を表記したスペイン人宣教者がこの問題を避けるために綴りを工夫して、“g”の後に“u”を追加したものと考える。総数としては「玉」という入声字の発音表記を「guiog \-」とする例が多いのだが、１例のみ「giog \-」とするものがあった。



→「玉」“giog \-”



→「玉」“guiog \-”

スペイン語の綴り規則で発音すると、1つ目の“g”が[g]と発音するが、2つ目の“g”は[dʒ]になってしまう。おそらく、後者の方が間違った綴りと言えるだろう。

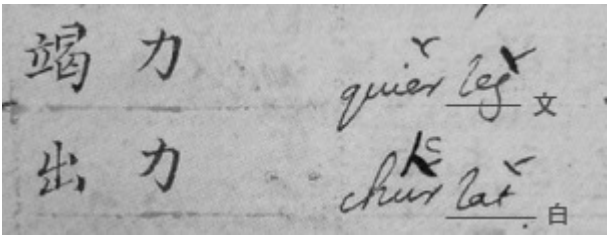
ちなみに『Arte』の方にも綴りの間違いだと考えられる表記が存在している。例えば「物」という字について「mi \-」と「my \-」の２種、また「六」という字について「lac \-」と「lag \-」の２種が確認される。これらについても、それぞれ違う発音というわけではなく、ただの綴りの違いであろうと考えられる。

4.2.　文白異読の場合

「文白異読」という現象は、閩南語の特徴の一つである。ある字に対して、使い方によって「文読（文言音）」と「白読（白話音）」という異なる読み方がなされることをいう。今回、『Dictionario』の入声字について調べてみると、『Dictionario』の中にも「文白異読」の違いと思われる例が確認された。以下は、数種の台湾語辞書を用いて調べた結果を表にしたものである。

対象字	文読	白読
一	it /-	chit \-
作	chog /-	cho /-
六	liog \-	lag \-
力	leg \-	lat \-
墨	bag \-	beg \-
奪	tuar \-	te \-
學	hag \-	o \-
席	seg \-	sia \-
得	teg /-	tit /-
惜	seg /-	sio /-
挿	ch'ap \-	ch'a /-

例えば、「力」について台湾語の辞書には「lik（文）」と「lat（白）」の２種の音を掲載している。現在の台湾語の辞書にみえる「lik（文）」と、『Dictionario』にみえる「leg \-」とでは綴りが違うが、おそらくどちらも［-k］韻尾を表すものであることが推測され、韻母の違いは単に採用された表記法が異なっているだけという可能性もある。おそらくは「文読」と「白読」という違いなのであろう。



「力」字の“leg \−”“lat \−” ２種

「得」字についても、『Dictionario』では「teg /-」と「tit /-」の2種が記録されているが、台湾語の辞書にはそれぞれ「tik（文）」と「tit（白）」

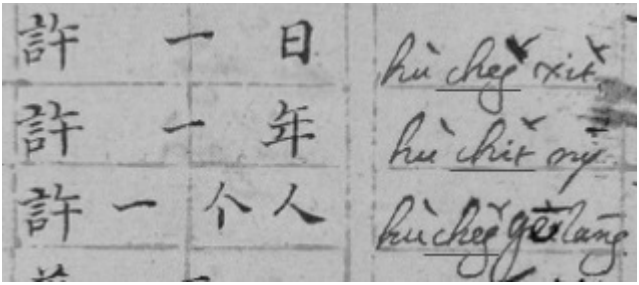
と記載されており、「力」の場合と同様に、現在の辞書では“i”と記された音が『Dictionario』では“e”と記録されたものと考えられる。

4.3.　泉漳片と潮汕片の違い

同じ閩南語でありながら、「泉漳片」「潮汕片」と「瓊雷片」とでは発音が大きく異なることも少なくないが、『Dictionario』の中にも、異なる方言とみられる発音を２例、発見した。

対象字	泉漳片	潮汕片
一	chit \-	cheg \-
宿	syog \-	zoa /-

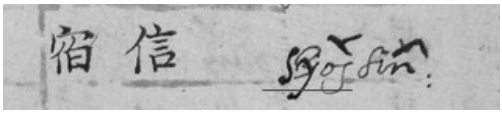
1例目は数詞の「一」である。閩南語の泉漳片では、「chit \-」（文読）あるいは「it /-」（白読）であるはずだが、『Dictionario』では「cheg \-」という読み方も非常に多く記録されている。潮州方言の辞書を見てみると、潮州音では「一」を「zêg8」と発音することが分かった。これは『Dictionario』の読み方と対応するものであり、おそらくはこの「cheg \-」という表記は泉漳片ではなく、潮汕片を記録したものであると考えられる。



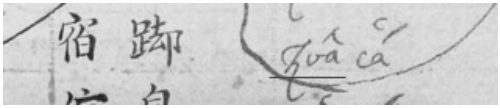
「一」字の“chit \–”“cheg \–”２種

2例目は「宿」という字である。『Dictionario』にはこの字について２

種の読み方が記されている。それは「syog \-」と 「zoa /-」というもので、台湾語の辞書には文読として「siok」が記載されていたので、『Dictionario』の「syog \-」はこれに該当する音だと思われるが、「zoa /-」については近い発音が見つからなかった。そこで、また潮州方言の辞書を参照したところ、「suah4」という音が見つかった。先述した数詞「一」の場合と同様に、『Dictionario』の「zoa /-」という音は潮汕片の発音を反映したものである可能性がある。少なくとも、現在知られる閩南語の情報からは泉漳片という判断はできない。



→「宿」“syog \-”



→「宿」“zoa /-”

ちなみに、『Arte』に記される「一」および「宿」の音を調べてみると、それぞれ「cheg \-」と「szoa /-」という読み方が記されていた。これに関連して、Klotter氏によると、『Arte』が編纂された当時のマニラ市の閩南語は、数種の異なる方言が混ざっているという。[6] そのことからKlotter氏は、当時の言葉、つまり『Arte』に書かれている言葉については、閩南語の泉漳片（Hokkien）ではく、“Early Manila Hokkien”（以下「EMH」という略称を用いる）と呼ぶべきだと述べる。“Early Manila Hokkien”を日本語に訳すと、「早期マニラ閩南語」になるが、こうしたEMHのような言葉が生まれた原因についてKlotter氏は、16世紀の晩期あたりからフィリピンのマニラでは異なる閩南語方言区出身の中国系移民が同じ集落に生活をし始め、それにより互いの言語が融合した結果であると述べている。『Dictionario』にも『Arte』と同様の発音の記録が確認されることから、おそらくは『Dictionario』が基づいた言語もEMHであった可能性も考えられ、EMHが存在したもう１つの証拠として注目すべきであるかもしれない。

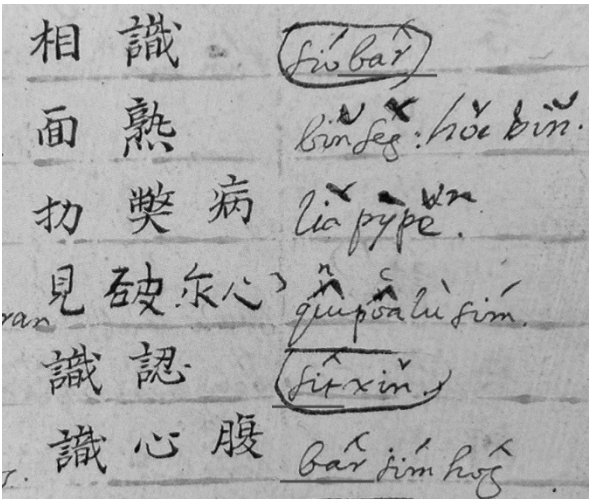
さて、当時の中国から来た移民は“Sangley”（サングレイ）と呼ばれる。この名前の由来は、“営業”（普通語の“生意”）という意味を有する「生理」だと考えられている。サングレイの研究者であるvan der Loon氏によると、サングレイは主に福建省の漳州から来たということであるが、[7] 他方で、当時の福建省とフィリピンの間の貿易について研究しているChia氏の調査によると、200家系が泉州から移住し、50家系が漳州から移住したとのことである。[8] 泉州と漳州とはいずれも閩南語の「泉漳片」に属する二つの方言である。その他の方言が入る余地がないが、興味深いのは、Klotter氏がChia氏の見解について、それが政府の記録から取られたデータであり、違法に移民した家系については必ずしも記録されていない述べる点である。Klotter氏は、違法に漳州から来た人の方が多かったとみており、さらに重要なのは漳州から来たといっても、それは漳州の港から出航してきたという意味にすぎないのであって、渡航者の出身は漳州に限らないのではないかということである。Klotter氏が述べるように、EMHの言葉は、漳州の方言、泉州の方言、潮汕の方言が混ざっていた可能性があり、実際の具体的な混淆の全容についてはなお不明ながら、少なくとも彼らに語彙を取材した『Dictionario』の編者から見れば、同一の言語とみなされるような状況ではあったのではないかと考えられる。

4.4.　当て字の利用

漢字表記が当て字であるために音表記と合わない例と考えられる入声字は以下の通り。

対象字	読み方	当て字の由来
作	cho ^	做
打	p’a /-	拍
接	zoa ^	線
識	bar /-	八、別

上表のうち「作」と「接」を当て字と考えたのは、声調記号が両方「^」になっていることによる。この表記のままでは、入声ではないということになるからである。「作」については「造」あるいは「做」が候補として考えられるが、台湾語の辞書で音を確認して推測するに、おそらくは「作」は「做（chò）」の当て字であろう。「接」については「連」「係」「繋」「線」あたりと考えられるが、「線」の音が「sòaⁿ」であり、鼻音要素以外は『Dictionario』の読み方と似ているところから可能性が高いと考えられる。「打」については、声調記号は入声のそれであるが声母が合わず、台湾語の辞書でも潮汕語の辞書でも音が異なっていた。「打」については「撃」や「拍」などが考えられるが、おそらくは「拍（phah）」の当て字であろう。[9] また、「識」については声母・韻母が合わない。「認識（分かる）」という意味の語として、厦門、潮州は「識」、福州は「八」を使うが、これらは“訓読字”（意味を取った当て字）であり、「八」については、漢・許慎『説文解字』（100年）の「八、別也（分けること、識別することである）」（二篇上）という記述を参考にすることができる。[10]



「識」字の“bar /-”“sit /-” ２種

5.　おわりに

以上に述べてきたところをまとめると、『Dictionario』にみえる入声字の音声表記、特に同一字でありながら音声表記が異なる例については、まず綴り規則の制約から、同じ声母・韻母であっても綴りが異なる例があった。また、それ以外に読み方が異なる字については、次の４パターンで解釈できる：①綴りの間違い、②「文白異読」の現象、③方言の違いと④当て字の利用。このうち、方言の違いについては、『Dictionario』は基本的に「泉漳片」（Hokkien）を反映すると考えていたため、「泉州」と「漳州」の２方言の違いについては資料の音表記に反映されることが期待されたが、実際のところ、さらに「潮汕片」（Teochew）を表すとみられる音表記も見出されたことは興味深い。

今後の課題として、例えば現在の閩南語であれば連続変調（tone sandhi）が起こることが知られるが、『Dictionario』にはそうした現象は確認されなかった。当時において連続変調それ自体が起こらなかったことは考えにくい。あるいは『Dictionario』の編者が記録を行う際、母語話者にそれぞれの字を単独で読んでもらう形式で作業を進めたため、一字一字の発音が記録され、当該の現象の反映がなかったのかもしれない。Klotter氏も『Arte』について連続変調が記録されているとは言い難いと述べているのであるが、この点については、『Arte』に比較して格段に語彙数の多い『Dictionario』のことであるから、入声字以外の収録字にも目を向けるなどして、なお詳しく調べる余地があると思われる。

また、サングレイによって話されていたEMHのような形で、現代の台湾語においても似たような方言の混淆が起こっていないかどうかという問題について、今後は詳しく調査を行いたい。泉州と漳州、双方の方言が混淆したことは知られているが、今回の作業を行う中で、泉州と漳州以外の方言についてもそうした混淆の可能性は十分にあるのではないかと考えるようになった。台湾の方言の研究においても、そうした現象を念頭に置く必要があると考えている。

【注記】本稿の内容は、2019年12月7日に大阪市立大学中国学会で行った研究発表に基づくものである。発表後の質疑応答の場で、新たな観点を示唆する有益なご教示を賜った方々に感謝します。

〈注〉

１）Lee, Chen, Jose, and Ortigosa. *Dictionario Hispanico-Sinicum: Part 1～3*. National Tsing Hua University Press. 2018.

２）Klöter Henning. *The Language of the Sangleys: A Chinese Vernacular in Missionary Sources of the Seventeenth Century* (Sinica Leidensia, Vol.98), Brill Academic Publishers. 2011.

３）Kwok, Bit-Chee (2018), p.4.

４）Kwok, Bit-Chee (2018), p.16.

５）Klöter, Henning (2011), "The Arte de la Lengua Chio Chiu (BMS): Transcript and Annotated Translation Transcript and Translation". Klöter Henning (2011), pp.175-369.

６）Klöter Henning (2011), p.173.

７）Van der Loon, Piet (1967), p.97.

８）Chia, Lucille (2006), p.513.

９）北京大学中国語言文学系『漢語方言詞彙』（語文出版社、1995）では「打」の項目で厦門、潮州、福州には「拍」が記されている。p.357。

10）北京大学中国語言文学系『漢語方言詞彙』（語文出版社、1995）、p.465。また、洪乾祐『閩南語考釋 附金門話考釋』（文史哲出版社、1992）、p.97。

参考文献

Kwok, Bit-Chee. 2018. *Southern Min: Comparative Phonology and Subgrouping*. Routledge.

Van der Loon, Piet. 1967. "The Manila incunabula and early Hokkien studies (part 2)". *Asia Major*.

Chia, Lucille. 2006. "The butcher, the baker, and the carpenter: Chinese sojourners in the Spanish Philippines and their impact on Southern Fujian (sixteenth-eighteenth centuries)". *Journal of the Economic and Social History of the Orient*.

黄晋波 2004 當代泉州音字彙
http://alt.reasoning.cs.ucla.edu/jinbo/dzl/dzl20120309.pdf
Walter Henry Medhurst. 1832. *A Dictionary of the Hok-Këèn Dialect of the Chinese Language* https://books.google.co.jp/
台語線定辭典. “http://210.240.194.97/TG/jitian/tgjt.asp”. 2019年11月.
潮州母語辭典. “https://www.mogher.com/”. 2019年11月.